

二人の救世主・魔女・聖女

おやさと研究所准教授

森 洋明 Yomei Mori

「フランスの聖女」と言えばジャンヌ・ダルクである。イングランド軍の侵攻からフランスを守り、百年戦争をフランスの勝利に導いた国民的英雄である。オルレアンやパリ、ランス、ルーアンなど、彼女の銅像はフランスの多くの都市に存在する。1412年に農夫の娘としてフランスの片田舎で生まれた彼女は、12歳の頃「フランスを救え」との神託を受け、1429年にオルレアンをイングランド軍から解放することに貢献し、シャルル7世をランスで戴冠させた。しかし、その後の混乱する政局のなかでイングランド側に売り渡され、宗教裁判で異端者とされルーアンで火刑に処せられた。

コンゴにもジャンヌ・ダルクと同じように数奇な運命を辿った女性がいた。「コンゴの聖女」あるいは「コンゴのジャンヌ・ダルク」と呼ばれていて、名前はキンパ・ヴィタ (Kimpa Vita)、洗礼名はドナ・ベアトリス (Dona Béatrice) という。フランスの聖女が亡くなってから2世紀半後の1682年(頃)に生まれ、没落の一途を辿っていたコンゴ王国に、一時期ではあるがかつての威光を取り戻すことに尽力した。

キンパ・ヴィタの存在は、コンゴ王国内で布教をしていたポルトガル人宣教師によって記録されている。ベルナルド・ダ・ガロ神父の報告(1710年)によれば、「この若い女性は、年の頃は二十二歳ばかり。ほっそりした身体つき、目鼻立ちは繊細、見るからに信心深げな様子をしていた。話し方は重々しく、一語一語慎重に言葉を選んでるように見えた」(フォーバス、p. 140)と記されている。

彼女が生まれた頃のコンゴ王国は、ポルトガルとの関係のなかでカトリック教化が進んでいたが、神父たちの腐敗や王国内での奴隷狩りの激化、また他の部族からの攻撃などによって崩壊寸前であった。頼りのポルトガル王国もヨーロッパにおける覇権争いに巻き込まれて疲弊し、アフリカやブラジルなど広範囲に及ぶ事業の維持が困難になっていた。衰退しつつあるコンゴ王国は、新たに海洋進出に乗り出したオランダ人との同盟関係によって、王権をかううじて保つことができなくなった。

しかも、王国内では3つの勢力が権力を巡って対立していた。ポルトガルに認知されていたペドロ4世、王の即位の儀に欠かせない秘跡を所有していたジョアン2世、そして王都サン・サルヴァドルにはペドロ4世に対立するキベンガが居を構えていた。このような状況のなかでコンゴの聖女は、神託に従って対立する王たちの仲を修復し、王国の再統一を試みるのだった。

病気で臨終の床にあったキンパ・ヴィタはある日修道士の声を聞く。それによると「彼女こそが聖アントワヌ (Saint Antoine: ラテン語読みではアントニウス) 自身であり、民衆に教えを説き、王国を復興する使命にある」ということだった。病の床から蘇った彼女は自身に与えられた使命を全うすべく、キンバング山に引きこもっていたペドロ4世に接触し王都へ戻るように促した。ジャンヌ・ダルクがシノン城にいる王太子シャルルを訪ねたときと同様、王の側近たちはキンパ・ヴィタのことをすぐには信じなかった。彼女は悪魔の使いではないかと疑う者もいた。キンパ・ヴィタは「一度は死んだ私の身体に聖アントワヌが宿っている」と語り王を説得した。それが聖アントワヌだったという

背景には、当時この聖人がポルトガル宣教師によって頻りに語られ、コンゴ王国内でもよく知られた存在だったからと指摘されている (SINDA, p. 45)。次に彼女はジョアン2世に対して秘跡を返すように願ったが、これは受け入れなかった。

その後キンパ・ヴィタは、彼女を慕う大勢の人たちとともに王都に向かった。王都ではペドロ4世と対立関係にあったキベンガと友好関係を結んだ。民衆に教えを説くとともに、さまざまな奇跡を起こし、これまでのキリスト教とは違う新しい教会を築き、都はかつての賑わいを取り戻した。修道院を組織して、新たな教えを受けた僧侶たちを各地に派遣した。

彼女の教えは、それまで白人中心の教えであったキリスト教を現地化したものだと言えるだろう。例えば、呪術や魔術を禁止する一方で、十字架は「キリストの死の道具」としてその使用を禁止した。イエスはコンゴ出身の黒人であったとし、彼の誕生の地はサン・サルヴァドルとなり、洗礼の地はンスンディだと説いた。民衆は彼女が神とともに食事をするために毎金曜日に亡くなり土曜日に復活すると信じた。彼女はコンゴ王国の復興のために神から送られてきた救世主(メシア)だと信じられ、やがて彼女を信奉する人たちはアントワヌ派(アントニウス派)と呼ばれるようになっていった。アフリカ化した教えは政治面においても、コンゴ王国の統一に賛同しない白人こそが社会の悪の根源だと糾弾、ポルトガル人がコンゴ王国に入植して以来一夫多妻制などそれまでの伝統的習慣を否定したことによって、社会システムが崩壊していったのだと訴えた。

こうした彼女の動きにヨーロッパ系宣教師たちが危惧の念を抱いていたことは言うまでもない。そこで、「聖女」であるはずの彼女が子どもを授かったことをきっかけに、白人神父たちはポルトガルの影響下にあったペドロ4世を説得し、民衆を惑わす異端者としてキンパ・ヴィタを捕らえ宗教裁判にかけた。ペドロ4世は彼女を逃がす計画を企てたが、彼女は自らの責任を受け入れることを選択したという。裁判の結果、民衆を惑わした魔女として彼女に死刑が宣告された。そして1706年7月1日(2日という説もある)刑が執行された。それはジャンヌ・ダルクと同じように火刑であった。

1431年に処刑されたジャンヌ・ダルクは、その25年後に行われた復権裁判によって無罪となった。そして1920年にはカトリックにおける聖女に列せられた。一方、キンパ・ヴィタは死の直前、自身が亡くなるうとも「黒人のキリストはまた復活し黒人の救済に現れる」と予言した。そしてその声は、コンゴ共和国やコンゴ民主共和国を中心に布教を展開する今日のマツワニズムやキンバングニズムといった黒人メシア宗教に受け継がれている。

時代も場所も異なるこの二人には、神託を受けての王国復興、聖女・救世主としての活躍、異端者として処刑、そして今日にも続く彼女たちへの崇拜といった共通項がある。そしてその背景には、政治と宗教の深い繋がりに加え、「異物」を排斥しようとするナショナリズムの力学が感じられる。

【参考文献】

ピーター・フォーバス(田中昌太訳)『コンゴ河 その発見、探検、開発の物語』草思社、1989年
MARTIAL SINDA, *le messianisme congolais et ses incidences politiques*, PAYOT, 1972